



MILFの拠点ダラパナン・キャンプの会合に赤ん坊を連れて参加する母親たち

Bangsamoro 報告

<第8話>

ミンダナオ平和構築支援の現場から

中坪 央暁

(国際開発ジャーナル社編集委員)

女性たち

モロ・イスラム解放戦線 (MILF) の拠点ダラパナン・キャンプは、自動小銃を携えた兵士が警備する検問所をいくつか抜けて中に入ると、ちょっとした市場やモスク、マドラサ (イスラム学校) が散在し、泥道をバイクタクシーが行き来する普通の村である。人口密度が高いせい、むしろ一般の農村より活気があり、さらには“イスラム同胞の村”という共同体意識の繭^{まゆ}にくるまれた不思議なユートピア感さえ漂う。

そんな市場の片隅で、掘っ建て小屋の店舗兼住居に野菜や飲料品を並べて売っているミスバ・パマンサ (49歳) は、「紛争には心底疲れしました。一日も早く本当の平和が来ることを願っていま

す」と訴えた。MILF部隊長だったミスバの夫は、エストラダ政権による2000年の大攻勢の際、当時の拠点アバカル・キャンプの戦闘で戦死した。ミスバは6人の子どもを抱えてマギンダナオ州内の故郷の村に帰ったが、そこも安全ではなく、その後10カ所を転々と避難した。「自分の力で子どもたちを育て、ちゃんと学校に通わせようと、農作業をしたり小さな商売をしたり、懸命に働きました」。03年にダラパナンに移り、今は成人した子どもたちにも手伝ってもらいながら、細々と商売を続けるミスバは、「多くは望んでいません。家族と一緒に落ち着いて暮らすことが、何よりの希望です」と話す。

サグイラ・ムサ（44歳）は、やはりMILF兵士の夫を1997年に亡くした。生後2カ月の赤ん坊を含む3人の子どもを連れて親戚の元に身を寄せ、雑用を手伝う傍ら、バナナやキャッサバを育てて子どもたちに食べさせた。「もっと稼げる仕事がしたかったけれど、満足に教育を受けていないし、手に職もないから、どうしようもなかった」。サグイラによると、貧しい母子家庭に対してマレーシアから何度か援助があったが、大きな助けにはならなかった。サグイラは近隣の村に住み、ダラパナンに通って来てコーヒーや菓子を売っている。「ここはイスラム教徒の土地なのだから、個人的には独立すれば良いと思うけれど…とにかく今はアキノ大統領が約束した通り、私たちのバンサモロ政府ができることを祈っています」。



MILF兵士の夫を亡くしたミスバ(右)とサグイラ

正確な統計はないが、MILFでは夫を紛争で失った女性が全体の約3割を占めるといふ。つまり、3分の1の家族がミスバやサグイラのような過酷な経験をしてきたことになる。



バンサモロの女性たちは家族を守りつつ、後衛部隊としても戦った。MILFの女性組織「バンサモロ・イスラム女性予備旅団」司令官という物々しい肩書ながら、ごく普通の老婦人といった風情のリン・グマンデルによると、同旅団には、①医療活動、②食料調達、③予備戦力の3つの役割がある。150~200人編成の大隊が31部隊、合計5,000~6,000人が参画している。入隊資格はイスラムの価値観を備えた18歳以上の女性で、報酬はなく、あくまでボランティア的な参加という。

グマンデル自身は、MILFの前身・モロ民族解放戦線(MNLF)の武装闘争が本格化した70年代前半からの古参で、戦いに加わった理由をこう説明した。「ある日、政府軍が私たちの村を襲って、父親と兄弟は首を切断されるなど虐殺され、女性は兵士たちにレイプされ、家も焼き払われました。

蛮行が日常的に繰り返され、おぞましい殺され方をした女性や子どもを見たこともあります。私は自分の人生をイスラムの戦いに捧げようと決意したのです」。こうした話をしばしば聞くが、特にマルコス政権時代の戒厳令下での弾圧、エストラダ政権による“全面戦争”の経験を語る人が多い。死者10数万人と言われる悲劇の記憶は、バンサモロの人々の心には昨日の出来事のように生々しく刻まれているのだろう。



コタバト北郊のスルタン・クダラット町に、紛争中の1995年に設立された地元NGO“INFO”が運営する女性職業訓練センターがある。日本大使館を通じた「草の根・人間の安全保障無償資金協力」で2007年と11年に施設2棟の改修・新築および機材供与が行われ、パン・菓子製造、食品加工、洋裁の3コースを不定期に開講している。修了生は2008~14年で1,552人に上り、「最初は紛争で夫を亡くした女性の支援が中心でしたが、現在は技能訓練を通じて、すべての女性の生計向上をサポートしています。平和の実現と地域復興のプロセスには、女性の参画が欠かせないと考えます」(ジュリー・マリガINFO代表)。

修了生の一人が経営する小さなパン屋が、ダラパナン・キャンプのゲート前にあると聞いて訪ね

た。アイダ・アリ（52歳）は数年前にパン屋を開業したが、作れるのはフィリピンで一般的な小さく丸い“パンデサル”だけで、売上もさっぱりだった。そこで2年前に「本格的な技術を身に付けてバリエーションを増やしたい」と一念発起し、INFOのパン・菓子製造と食品加工コースを2週間受講した。今ではパンデサルに加え、食パンや星形パン、チョコレートパンなど数種類のパンや菓子を焼けるようになり、以前は1日わずか75ペソ（約190円）程度だった売上が、今や1,200ペソ（約3,000円）と実に15倍にもなった。

「見様見真似ではダメだと分かって、研修ですべてが変わりました」。店では働きながら学ぶ男子学生が助手を務めるほか、農業兼MILF兵士の夫も何かと手伝ってくれる。「バンサモロの女性は働き者。女性だから制約があると感じたことはなく、家族のためにやりたいことをやれば良いのだと思います」とアイダは明るい表情で話した。



ジェンダーの視点を加えておきたい。JICAと米ジョージタウン大学の連携事業として、ミンダナオ紛争を対象としたプロジェクト研究「平和構築における女性の参画とリーダーシップの推進」の現地調査が7～8月に実施された。国連で2000年に「女性・平和・安全保障」決議が採択されて15年、各国の具体的な取り組みは進展せず、日本外務省も勧告を受けて行動計画策定を急いでいる。こうした状況を背景に、日本が関与するミンダナオ紛争と平和構築を題材に選び、提言につなげるのが目的である。

JICA国際協力専門員（ジェンダーと開発）の久保田真紀子は、5月の予備調査に続いて、ムスリム・ミンダナオ自治区（ARMM）政府やMILF、NGOなどの関係者と面談した。率直な印象として、久保田は「女性たちが自分の役割を認識して主体的に行動し、あるいは行動したいと思っているのを強く感じます。例えばMILFの女性たちは、若い世代へのイスラム教育、地域の防災対策など、自分たちが担うべきことに自信を持って取り組んで

いると思いました」と話す。私見ではバンサモロの女性たちは概して明るく、ことさら抑圧されているように見えないが、久保田の聞き取りでは「紛争中は兵士によるレイプが多発し、今でも家庭内暴力（DV）や性暴力、子どもに対する虐待が少なからず報告されています。イスラム教には女性の社会参加を妨げる教えなどありませんが、『女性が家を空けたり、リーダーになったりするのは文化的に受容されない』という男性優位の価値観もあるようです」。

他地域と比べて開発が遅れたバンサモロの女性たち、とりわけ妊産婦や母親たちが置かれた厳しい状況は、指標からも読み取れる。国家人口統計・保健調査によると、2008年の乳児死亡率（1,000人当たり）は、全国平均25に対してARMMは56、同じく5歳児以下の死亡率は34に対して94と、同じ国とは思えないほどの格差が見られる。

久保田は、男女の役割について伝統的な考え方が根強いアフガニスタンで4年間、女性のエンパワメントに向けた支援を手掛けた経験がある。「日本の開発協力では、この10年ほどジェンダーの視点が強化されていますが、まだ充分とは言えません。単に“かわいそうな女性を保護する”と



職業訓練を受けてパン屋を経営するアイダ(右)



コタバト市内でイスラム女性向けの服飾店を営むマイムナ(左端)

いう発想ではなく、女性を主体的な開発の担い手として支援する方策を模索する必要があります。バンサモロでも職業訓練のレベルに留まらず、女性リーダーの育成など、さらに女性が活躍できる場を広げるための提言ができればと考えます」と方向性を示した。



女性と布地をめぐるコタバト点描を2題。現地マギンダナオ語で「タンドゥン」と呼ばれるスカーフを被ったイスラム女性たちは、暑くて不自由そうな半面、ファッションを自在に楽しんでいるようにも見える。ARMM政府前の通りには、専門の服飾店が立ち並び、奔放な色遣いに凝った刺しゅう、スパンコールを散りばめたワンピースやロングドレスを品定めする女性客が絶えない。そんな店を30年来営むマイムナ・ペンドン(60歳)は「紛争中は命からがら逃げ回ったこともあるけれど、やっと状況が落ち着いて、今は商売も上々よ」と笑って見せた。

お手頃商品はインドネシアやタイ、中国からの輸入物だが、一番高いところには地元マギンダナオの織物が別格扱いで掛けてある。「世の中が平和にならないと、女性がお洒落したり買い物したりする余裕もできないでしょ。早くバンサモロ政府ができて、景気も良くなると嬉しいわね」。



名門マストゥラ家の伝統織物コレクションを見せる当主夫妻

伝統織物のコレクションを見せてもらえると聞いて、バンサモロの名門マストゥラ家を訪ねると、元下院議員の当主マイケル・マストゥラ夫妻がにこやかに迎えてくれた。スルタンの血統を誇る一族で、大仰ではないが凝った造りの邸宅である。いかにも上品な夫人のローデス(75歳)が早速、自慢の絹織物を次々に取り出し、「30数年かけて100点ほど収集しました。これは100年以上前に織られた貴重な布ですよ」と説明しながら広げていく。イスラム女性の巻スカートなどに使う布地は、マギンダナオやマラナオ、島しょ部などバンサモロの中でも民族・地域によって文様や色遣いに違いがあり、幾何学模様にも花や葉っぱ、カエル、風車など個々に意味があって、一枚一枚見ていて飽きない。ローデスによると、複雑な文様を織り上げる熟練の織り手はほとんど残っておらず、伝統技術が途絶えないうちに継承しようと若手の育成を試みたこともあるが、「今の子どもたちは根気がなくて」続かなかったという。

「織物はバンサモロの人々の歴史そのもの。粘り強さと調和、創造性が織り込まれた私たちのアイデンティティーであり、平和の象徴でもあります。こうした伝統文化を何とか大切に残していきたいのですが…」織物を手にローデスは思案顔で語った。
*文中敬称略(つづく)